昭和48年2月11日発行通巻99号(毎日曜日発行) 昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日＝ラルース

2/11
220円
98

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〟は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（2），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《1～128号の内容は表3参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけでなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〟として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〟全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表3「本誌の購読について」をごらんください。

目　次

世界動物百科　第98号

カラーページ

私たちの仲間

監修　浦本昌紀（山階鳥類研究所）
翻訳　権　寧（本州大学講師）

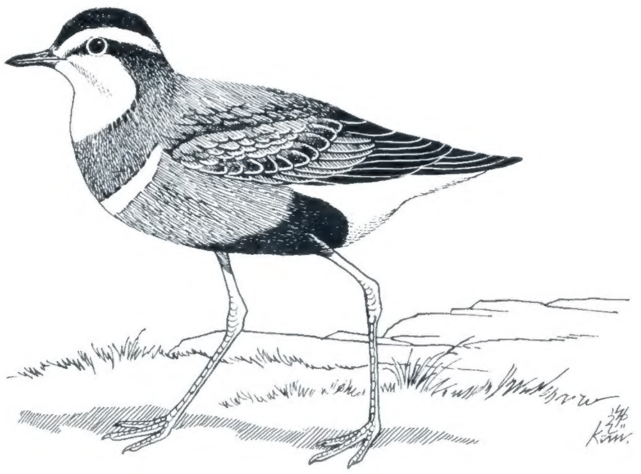
凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注1〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆ 32

コバシチドリ

Charadrius morinellus



文　内田康夫
え　木村しゅうじ

ヤナギの下にドジョウはいない，という。ところが，動物に関するかぎり，やはりドジョウはいるのである。動物は種類ごとにそのすみ場所が決まっており，その好みは頑固でさえある。『野鳥』287号に高野伸二氏が寄せた文章を引用してみよう。

「渋谷の山階鳥類研究所の2階，標本室のある引きだしのなかに1羽のコバシチドリの標本がある。それについているラベルに（中略）次のように書いてある。〝昨年ノ捕獲地ヲ去ル凡ソ1里，小和田海岸ニ近キ小池ニ発見ス。捕獲月日ノ偶然均シカリシモ奇トスベシ。（珍奇ナル標本ナリ）〟　これは採集者の松平頼孝氏が書いたものであるが，これによって1914（大正3）年と1915年の同じ日（9月29日）に神奈川県で1羽ずつのコバシチドリが採集されていることがわかる」

この鳥は全長22センチ，頭と胸の白線が特徴で，夏羽の腹は赤い。ユーラシア大陸北部とバイカル湖周辺その他で繁殖し，日本では，計11回の記録がある。■

サファリ 上

小原秀雄

ツァボのゾウを〝見る〟



撮影　青木　保

わたしたちが動物園でしかお目にかかれぬゾウやライオンが，アフリカではどんな生活をしているのでしょうか。昨年，1か月にわたって，東アフリカの野生動物を見てまわった動物学者・小原秀雄氏に，本号から3回に分けて専門家の目に映じたアフリカの野生動物たちの姿を紹介していただきます。



キリマンジャロの遠望，マサイアンボセリ　撮影　青木　保



キラグニロッジのベランダから見える水場　撮影　小畔光一

直径10メートルはあるまいと思われる池の，向かって左のはじに，若い雄のアフリカゾウが1頭水を飲んでいた。虫の音が絶えることなく，気にするとうるさくてたまらないほど荒野に満ちていた。

ロッジの前の水場

荒野，わたしたちの視野のとどくかぎりは，文字どおり荒野だった。数百メートルもあろうか，荒野はその辺で山間(やまあい)によってよぎられてはいたが，山の上のほうまで荒野は続いていた。短い草と，とげの多いブッシュとである。

夕食がすんで部屋にもどると，この荒野はほぼ完全に闇(やみ)で閉ざされていた。池のまわりに，巨大なライトがつけられていたが，かえってライトのとどかぬ場所を暗黒に塗りこめていた。灰色のゾウは，背景の黒から浮きだしていた。ゾウの右手から，1頭の雄のクロサイが近づいてきた。池にもっとも遠いはじに立ち，しばらくの間ゾウのほうに頭を向け，立ちつくしていた。鼻孔がぬれて光り，そのわき腹のしわが目だった。

アフリカゾウとクロサイのにらみあい，そう表現できそうな光景であった。だがよく見れば，ゾウのほうは全然サイを無視していた。風向きのぐあいでにおいがいくらかとらえにくいかもしれないが，ゾウの目でも，じゅうぶんにサイを確認できる距離だ。しかし，ゾウは，まったく悠々(ゆうゆう)としていた。

ゾウの無関心がわかると，サイは注意深く，しばらくゾウのほうを向いたりし，やがて口をつけて水を飲みはじめた。サイの影が映っている水面に，サイの口の動きが起こした小波が波紋としてひろがっていく。

暗闇からわき出るようにしてゾウのあとからアフリカスイギュウの群れがやってきた。かれらの音，姿，そしてにおいが池の左側の岸を埋める。多数のスイギュウである。

しかしアフリカスイギュウの群れは，ゾウが水を飲んでいる間は，どうしても水を飲まない。あるいは飲めないのであろう。ウシ独特ののどから絞りだすような声でほえつつ，足踏みするかのように立つが，ゾウは文字どおり見向きもしない。知ってのとおり，スイギュウは気が荒い。アジアのスイギュウの特徴のひとつは，ゾウやトラも恐れぬ獰猛(どうもう)な性質だといわれる。アフリカスイギュウは，アジアスイギュウにまさるとも劣らぬ剛の者。しかしながらアフリカゾウにはまるで歯が立たないということだろうか。というよりは，かれらは必要以上の暴力は振わないということでもあろうか。

ふとアフリカゾウが水を飲むのをやめた。動きが伝わってか，サイもやめる。

若い雄のアフリカゾウはやがて水から鼻先を離すと，軽くからだを動かして池から遠ざかる。サイはゾウの動きについて顔を動かす。しかし水場からは離れない。

サイは水辺に近づくときに，右手を大きくまわって池に近づいた。しかしゾウのほうは自分の必要な場所へと移動するのに直線的である。その後ろ姿をサイは見送り，やがて数十メートルも先に見えなくなると向き直り，今度は，さっと水に口をつけて再び飲むのだった。クロサイは，ゾウのいる間はゾウが何かするたびに水を飲むことを中断していたが，今度は心ゆくまで飲むように見えた。待ちかねたスイギュウの群れもどっと水を飲む。西部劇でウシの群れが水を飲むありさまを思いだす。ツァボのウングリア・ロッジは，このような人工的な水場を備えている。動物を見せるためであろう。

インパラに迫るライオン

ロッジは山の上にある。池の右手はなだらかな起伏があり，ロッジの下方にも荒野がひろがる。それは地平線に囲まれた荒野であり，全体が茶色である。その広さは，ただ広大としかいいようがなく，茶色のかすみとなって地平が描かれている。ツァボは，西と東とで国立公園が分かれている。ここは四国並みの大きさの国立公園である。広大なのも無理のない話だ。

ツァボには，モンバサからナイロビをへてウガンダのカンパラにいたる鉄道が通る。この鉄道建設を巡って，人食いライオンが思う存分人間狩りをしたところである。これは有名な話で，2頭の人食いライオンはたてがみのない雄であった。人肉をかむ音が，キャンプのすぐそばの闇に響いたという。その肉は，ついさっきまで，今度はだれの上に悪魔のおぼしめしがおよぶかを，ともにおののいていた仲間のひとりのものだった。

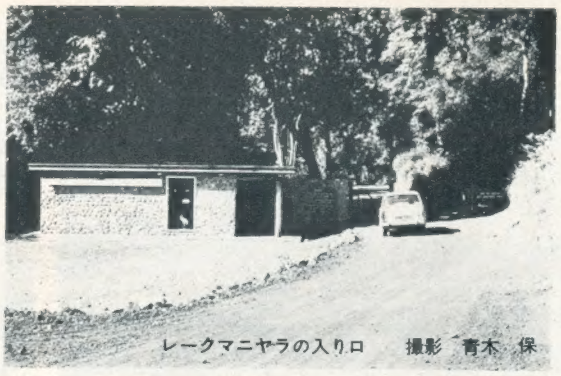
同じ闇が夜をますます深くしているとき，池のほうでは，スイギュウたちが交替で水を飲む騒々しさが続いていた。クロサイは，アフリカスイギュウたちのうなり声と水をかきまわす音にときどき耳を動かしながら，ひたすらに自分の渇(かわ)きをいやし，やがて立ち去った。



私たちの仲間

98号…2月11日


ナイロビ市内　撮影　青木　保


レークマニヤラの入り口　撮影　青木　保

騒々しい水飲みは終わり、スイギュウたちも闇のなかに消えた。しかし、よく見るとスイギュウたちは池のすぐ左手にある広い草原で草をはみ、眠りについていく。それはほぼ夜の12時ごろであった。

夜明けだった。いや正確にはまだ夜がしらんでもいなかったから、明けがたの闇のなかでのことだ。窓べのベランダのすぐそばまで、突然数頭のレイヨウが走ってきた。闇を透かして見て、わたしはそれがインパラだと確認できた。インパラの雌たちが跳躍して騒いでいるのを見て、わたしはふと何か肉食獣がいるのではないかとひとみを凝らした。すると夜目なので不確かではあるが、なにかが動いていた。

ライオンであった。その動きは独特である。インパラは、「ブルー」というような鼻声を出している。これがインパラの警戒音なのは、文献でも、また前にアフリカにきたときにも聞いてわかっている。1週間ほどナイロビに滞在して、わたしはナイロビの国立公園に通った。そこで動物の観察を続けたが、その際、インパラが発した警戒音とポーズとが焼きついている。

インパラの鋭い警戒音が出たので、ライオンはもはやインパラに見つけられたと知ったためであろうか、別に隠れもせずに歩いている。インパラ狩りに失敗したとみてとったライオンは、長居は無用と引きかえしはじめた。アフリカスイギュウの黒いかたまり、その群れが動いたのはそのときだ。中心に子と雌とがいるとよくいうが、確かにスイギュウの群れは中心に向かって空間をせばめるように中央に寄った。スイギュウの群れの円形が縮んだのである。

ライオンはゆっくりと通りすぎ、反対側の山の裾野を回って姿を消した。

ライオンの姿が見えなくなると、インパラのざわめきの波が消え、しだいにふつうの歩行に移っていった。一方、アフリカスイギュウの群れの輪は再びゆるみはじめ、分散するのが見られた。この傾向は、他の場所でわたしたちがスイギュウに近づいたときの経験からも、確かなように思われる。しかし、スイギュウの群れに哨兵的役割を果たす個体がいるかどうかはなんともいえない。

夕暮れから見ていると、このほかにも、ケープウサギが池とベランダのあいだをはねて動きまわったり、ブチハイエナが出てきたりもした。アフリカゾウが左手の自動車道路近くのやぶから現われ、2頭いっしょに池で水を飲む光景もあった。池で水を飲む前に、ゾウたちは鼻であいさつをしあっていた。

空がしらむと、スイギュウたちは動きはじめ、人間も活動をしはじめた。アフリカの一夜はそれで終わった。

巨獣も包みこむ大地

このウングリア・ロッジに宿泊する前に、ツァボ西のアンボセリ側ゲートからわれわれの車はツァボ国立公園にはいったが、ロッジにくるまでの間に、すでにゾウを目撃していた。アフリカゾウはアフリカそのものだ。アフリカゾウを〝見た〟とき、アフリカにきたという実感がはじめて迫ってきたといえよう。

ツァボは、きわめて乾燥した地域である。ゾウはどちらかといえば、もっと湿潤なところが好きだ。しかし、すぐれた適応力のためか、ストレスにかかりそうな土地にもずいぶんいる。帰りに寄ったアンボセリ・ゲーム・リザーブ（野生生物保護区）は、まるで半砂漠となった土地だが、2頭の雄ゾウにわれわれは出合い、1頭は砂浴びをやっていた。アンボセリにもゾウは多いという。

ツァボのゾウはゾウの研究家サイクスによると、高血圧らしい血管の異常が見られるという。ツァボを走りながら、ゾウを見てわたしはそのレポートを思いだした。サイクスは高血圧の要因を乾燥した環境に置かれたためとみなしている。ゾウは湿度の高い森林が好みの地で、かわいている土地では、しじゅうストレスにさらされているのだというわけである。

だがともかく、わたしの2度めのアフリカは、やはりツァボのゾウからはじまった。アフリカの水を飲んだものは必ず帰るとかいうが、アフリカのゾウを見た者は必ず帰る、とわたしはいいたい。

だが、〝見る〟とは実にいろいろである。アフリカにいってもわたしたちは単に〝見る〟ことしかできない。わたしたちの場合、この〝見る〟とは動物学的な観察であって、事はそう簡単ではないけれども……。

アフリカは広く、動物たちを自然のなかであるがままに見ることができる。確かに荒野のなかにおいたとき、動物はもっとも動物らしい。それが目前に見られ、しかも夾雑物のないところ、それがアフリカの最大の魅力である。細かく見れば、アフリカのそのような状況にも、現代的な変化の波が押し寄せてはいるのだが、それでもアフリカにはまだ、それを忘れさせる場もある。

ナイロビの空港から、マイクロバスが走りだし、レンガ色の土が埃を舞いあげた。アフリカの土と空気と雲，それはアフリカの生物界の舞台である。

この舞台は、サファリ（野生動物を見る観光旅行）が進むにつれて変化する植物相の姿と地形とで、つきることのないすばらしさを展開する。ひと口にサバンナといっても、短い草、低木林、あるいは林が混じるといったさまざまな違いがある。おそらく植物生態学の専門家は、それなりに区分をするのであろう。わたしが都立大の植物生態学の知人から借りた植生図はケニアのものだけだったが、それなりに区分されている。しかし、実態はその区分よりも、さらに細かな変化を次々としていく。そこにそれぞれ動物を置くと、いうにいわれぬ調和のとれた光景を描きだす。

アフリカゾウは，雄のほうが雌より大きい。平均して6トンというが，6トン級はそういるものではないらしく，3.5トンというのがまず一般的らしい。しかし一方では12トン余りという例も，アンゴラで知られている。肩高は3メートルから4メートルである。

こういった巨大動物が，アフリカの舞台のなかにはいると，それが日本の森林でシカなどがいるのと同じように，そのなかにとけこむのだ。それどころか，広漠たる（こうしか表現しきれないもどかしさを感ずるが）広大なサバンナのなかで見つけるとあんな小さなものがゾウだろうかと思わせるほど，小さな存在にまでなってしまう。

このアフリカの底知れぬ巨大さは，地理観念を狂わせる。1枚の紙になっている地図で，ここからここと指でさすと，すぐに100キロの単位になる。地図の中央部，湖をひとつ越すだけでジェット機で1時間かかる。地図で見れば，たいしたことのないビクトリア湖が，北海道の面積にくらべ得るのである。

地図で調子が狂うのは道路もだ。前回のアフリカ旅行の際，わたしが地図でりっぱな道路になっているところを指でさし示し，こういこうというと，いけないという。腹を立てていろいろ聞いてみると，その程度の道路では山ではいつ通れなくなるかわかったものではないとのことだった。

要するに安全確実な道路は中心部にわずかにあるだけである。それでも，6年前のサファリと同じ道を通ると，かなり舗装されていた。

向こうまかせの不自由さ

1972年の夏，わたしは団体旅行の一員として，25日間ほどアフリカを旅行した。マイクロバスに分乗して，ケニア，タンザニア，ウガンダの動物保護区と国立公園をできるかぎりまわって歩いたのである。キリマンジャロのキボ地帯，現在ではアルーシャ国立公園となっている，ウンドゥートゥー，モメラの両地区だけには今回いけなかったが，ほかはみんなわたしが過去に訪れたところである。また，そのほか今回新たに足をのばしたところもある。

だが，この旅行に参加してすぐにわたしは，思うように動けないことを悟った。国立公園のなかに宿泊できない地域がかなりたくさんある。そうなると，地図の上ではすぐ近くても，ほとんどの国立公園はよく見られない。動物は，自然のなかにおいてこそ動物であるのと同じように，行動すればこそ動物だ。だから動物が動きまわるのが見られなければ，動物を見たことにはならない。長い観光旅行の結果，アフリカ人のドライバーたちは，動物の写真をとれば終りだと思いこんでいる。だからいくら待ってくれといっても自由にはならない。それに5台のマイクロバスともなれば，これは当然であろう。観光会社のつきそいはしきりに走りまわって努力をする。しかし，定められたこと以外融通はきかないのがア


トムソンガゼル　撮影　青木　保


マサイアンボセリの水場　撮影　青木　保



アフリカゾウに食いけずられたバオバブの木の残骸　撮影　小畔光一



アフリカゾウの白骨をさし示す筆者　撮影　小畔光一

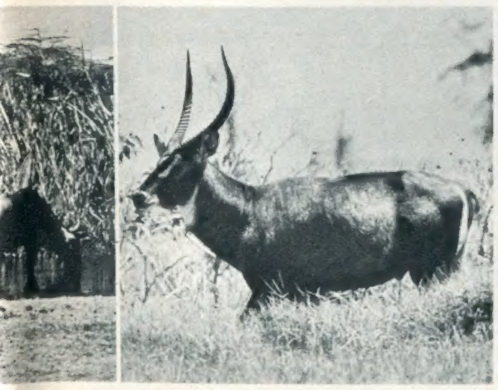
フリカ人である。

だが、こういったサファリのなかでも、動物が自然のなかで示すいくつかの場面を見ることができる。それは、わたしたちにとって、興味深い自然史の一端である。

今度の旅行と、前回の旅行とで目撃した哺乳類の一覧表をあげておこう（**別表**）。わずかの期間でも、わたしはこれだけの哺乳類を見ている。それだけアフリカの動物層は豊かだともいえる。前回と違って今回のドライバーは、ドライバー専業で動物を発見する能力に劣るので、こちらが目を皿のようにしていなければならなかった。少々目が疲れた。

前回のサファリは、ワンデコアと名乗るドライバーだった。かれは信じられないほどの目をしていた。セレンゲティの平原で、ほとんど何も見えないと思われる場所で、ドアを半開きにして自動車から周辺を見渡し、その後黙って車を走らせるとチーターの腹ばいになっている所へ車をつけるのだった。

それと同じようなポーズだけは、前回にナイロビの国立公園を訪れたときに雇ったドライバーもやったものだ。しかし、それは格好だけだった。もうひとりのみごとなガイドがおり、それは当時日綿実業のナイロビ支店長だった山口氏の運転手リスタだった。かれは、同氏のドライバーになる前には、ガイドをやったとかいう話だった。実際に、そのみごとな追跡能力のおかげで、わたしはナイロビの国立公園でチーターを何回も見た。今はもう遠い思い出でしかないが、リスタはまだ暗い朝の6時きっかりに、コリンドン博物館近くのアインスウォースホテルにひとりで泊まっているわたしを呼びにきてくれたものだ。それから10時ごろまでナイロビの国立公園での動物観察、ついで食事、そして博物館か図書館行き、そして夕方からの国立公園行き、そんな日課がほぼ8日ほど続いたものだった。まさに優雅な生活だった。



ウォーターバック　撮影　青木　保

同じような場所でも回を重ねて通うとさまざまな発見も多い。ナイロビ国立公園は、アフリカのなかでもっとも小さく、東京都内のひとつの区ほどである。しかし、よく調べてみると、ここはそれなりに動物も豊富だ。国立公園は、かつての野生動物の生活していた土地をそのまま保存したものが基本だ。アッシ川にはたくさんの野生動物が20世紀のはじめにもいて、目をつむって撃っても当たるなどといわれた場所だった。今の国立公園はそれとそう違わない。

旱魃を乗りきった勇者

〝見る〟という点で、アフリカがいちばんいいのは、見通しがきくので多くの動物をひと目で見られるという点である。そのために、1頭の動物を個々に、その種の世界を構成する単位として見ることが、現実に可能になる。いわゆる種社会の構造といったものを、全体的にとらえることができる概観ができる。

巨大なアフリカゾウについてさえそうで、マニヤラ湖畔では、全体的にアフリカゾウがいるなかにマイクロバスを乗り入れることで、そのありさまをつかむことができた。同じようなことは、マーチソン・フォールズ国立公園でも、ゾウの群れ（群れというよりは地域個体群）のなかにはいりこんでいって、それを見ることができた。

ツァボでも、わたしたちはとくにツァボ東の国立公園へいった。ツァボの東は西にくらべると、ゾウが多い。団体旅行の日程にあったツァボ西行きのスケジュールを無理をいって変更してもらった。そして東を見にいったのは、ひとつにはは東が先年の旱魃で多くのゾウが死んで問題になったところなので、その後がどうなったかを見たかったのであるが、なんといってもゾウに、わたしの関心がひきつけられているからでもあった。

所々に点在しているゾウは、ひとりでいるのはまちがいなく雄が多い。前回にツァボで見たゾウ群は、雌と子とが中心ではあったが、明らかに1頭の巨大な雄がそれに加わっていた。ツァボ西へキリマンジャロからはいってきたわたしたちは、きわめて大きなアフリカゾウの群れを見たのだったが、それは道路からだいぶ遠く、しかもその一帯は低木林のブッシュでとても車を乗り入れられなかった。

ツァボ東へウングリア・ロッジから出ていく途中、わたしたちは右手の川岸にまた子連れの雌ゾウを見た。やや細めのきばがきれいにのびた雌で、子を2頭連れていた。

雄でもひとり暮らしなのか、その個体だけ見るかぎりではそうである。だが、地域全体を頭のなかに描くと、これらもみな地域個体群の一部になる。ひとりでいる雄も、わたしたちが遠のけば、しばらく歩いて他の群れのもとにいくのかもしれない。ぶらりと散歩をしにきたようなものだろう。もちろん、そうでなくて、ひとり暮らしの可能性もある。ゾウは独特の深い口を開いて、木の葉を枝ごと食べる。よく食べている個体を目撃できた。なかには、数頭の群れで集まっていたうちの1頭が、頭をぐんと下げてきばを木の根元にさし込み、根を掘りだして食べるのがいたりした。

また、木の陰で大きな耳をときどきパタパタと動かして、放熱をさせながらまどろんでいるのを見た。しかし、人間が近づくと、かれらはぴたりと眠りをやめて、鼻を動かしはじめた。まどろんでいるときには、鼻は鼻先を軽く巻いて、ダラリと力をぬいている。それなのに目ざめたゾウは神経質そうに口に鼻先を運ぶ。ある研究者は、鼻の巻き方、持ちあげ方が、ゾウの合図になるという。確かにわたしは今度のサファリで、鼻でさわりあうのを2，3回見ているが、これ以上の細かい合図については詳細はわからなかった。

〝見る〟ことは、実にむずかしいものである。

ツァボ東では確かに白骨となったゾウの死体があった。旱魃の〝跡〟である。また、むしられたバオバブの木も見た。とはいえ、ほかにはあまり旱魃による、この地域のゾウ群を襲った不幸について、その〝つめ跡〟をそれほど見つけることはできなかった。

ツァボ東は、ほとんど人間に出会うことはない。ムダンダ・ロックという巨大な軍艦ほどもある1個の石の上から見物し、さらにクロコダイル・ポイントというガラナ川の名所へいって帰り道に、わたしたちはみごとな雄のゾウを見た。

ゾウは、左側の土手を登ってきて、道を横切り、われわれのマイクロバスを避けるように小走りに急いで、右側のブッシュに向かった。強烈な陽光と、かわいて皮膚にこびりついたどろとから、ゾウはまるで黄白色に見えた。肩まで、3メートル半はありそうで、太いきばの根元はほぼわたしの太ももほどはあったように見えた。巨ゾウが立ち去るときの後ろ姿には、ツァボ東の大旱魃を乗りきった力強さがあったが、しかし、その姿から旱魃について、何事かを引きだすことはできなかった。■

（女子栄養大学教授）

アフリカで見た野生動物

		前回 1966年	今回 1972年
霊長目	ヒヒ（ドグエラ）	○	○
	〃（キイロ）	○	○
	サバンナモンキー	○	○
	ブルーモンキー	○	○
	クロシロコロブス	○	○
	パタスザル	○	
食肉目	セグロジャッカル（ギンセジャッカル）	○	○
	オオミミギツネ	○	○
	コビトマングース	○	○
	アフリカジャコウネコ		○
	モリマングース		○
	シママングース	○	
	ジェネット		○
	ブチハイエナ	○	○
	ツチオオカミ		○
	サーバル	○	
	ヒョウ	○	○
	ライオン	○	○
	チーター	○	○
岩狸目	イワハイラックス	○	○
奇蹄目	シマウマ	○	○
	クロサイ	○	○
	シロサイ		○
長鼻目	アフリカゾウ	○	○
	マルミミゾウ		○
偶蹄目	イボイノシシ	○	○
	モリイノシシ	○	○
	カ　バ	○	○
	キリン（ウガンダキリン）	○	○
	〃（ケニアキリン）	○	○
	キルクディクディク	○	○
	ス　ニ		○
	アカダイカー	○	
	トムソンガゼル	○	○
	グラントガゼル	○	○
	ゲレヌク	○	○
	ウガンダコーブ	○	○
	リードバック		○
	ウォーターバック	○	○
	シンシンウォーターバック	○	○
	インパラ	○	○
	ト　ピ	○	○
	ジャクソンハーテビースト	○	○
	コンゴニハーテビースト	○	○
	オグロヌー	○	○
	オリックス	○	○
	イランド	○	○
	レッサークーズー		○
	オリビー		○
	アフリカスイギュウ	○	○
齧歯目	ケープノウサギ	○	○
	ジリスの1種		○
翼手目	コウモリの1種		○

アマゾン動物記 10　伊沢紘生

河旅の風物詩

≪プトマヨ河を下る≫

プトマヨ河の下流、ジュビネト川の奥には、まだ西洋文明の影響をほとんど受けていない裸のインディオ、セコヤ族の集落があるという情報をわたしたちは得ていた。

レギサモ周辺の森は開けすぎていた。今もって未開のインディオが住んでいるような、森林の奥深くへいけば、もしかしたらサルの調査に適した場所があるかもしれない。あるいは近くにそうした場所がなくても、きっとかれらはアマゾンの森林についてたくさんの情報を持っていることだろうし、そのなかから調査地探しの手掛りがつかめるかもしれない。

8月18日，わたしたちは長さ20メートルのボートをチャーターしてプトマヨ河を下り，ジュビネト川までの長い河旅に出発した。

プトマヨ河はひどく蛇行していた。広い川幅とこの蛇行とによって，中州や浅瀬があちこちにあり，ボートは流れの筋に従いながら，右へ左へジグザグ行進を繰り返した。

出発してしばらくは，流れの筋がこの先でどうなっているのかを予測したり，両岸の森を遠望したり，流れいく雲の変化を写真に撮ったりして，河旅を楽しんだ。

しかし照りつける灼熱の太陽，それにほとんどなんの変化もない周囲の風景は，わたしに飽きを感じさせはじめた。いけどもいけども，眼前に展開するのは鏡の面のようになめらかな，湖と呼んだほうがふさわしいような，だだっ広い河面と，白い雲の浮かぶ大きく青い空と，両者を区切る緑の壁の連なりだけの世界であった。

わたしは眠気を催していた。そのとき，単調さと鏡のような水の面を突き破って，1頭のイルカがはねた。続いてもう1頭が大きくとび上がった。ボートのスピードを落とした。やつらはエンジンの音やボートを少しも気にとめていないふうだった。

ボートはゆっくりとそこを通過した。1頭のイルカがボートの残した航跡を20メートルぐらい追ってきて，引き返した。

アマゾンイルカ（*Inia geoffrensis*）はプトマヨ河にはどこにでも生息しており，支流のかなり川幅の狭くなった流れのなかにさえすんでいた。そしてその後の河旅でも，幾度か，水面に白灰色の姿を現わしては単調な風景に飽きたわたしを慰めてくれた。ただいずれの場合も，旅のスケジュールに縛られて，やつらをじっくり観察する時間を持てないでいた。

やっとその機会を得たのは，パヤ川へ調査にいった帰りの，みずからが招いたエンジンの故障の結果だった。

≪砂州の夜と朝≫

パヤ川上流域での予備調査を終えて，レギサモの街へのもどり道，狭い川幅ときついカーブをわたしの運転技術では乗りこなすことができず，パヤ川を下りはじめてまもなくの間に，舟尾を何回も土手にたたきつけて，エンジンをこわしてしまった。そのため，途中から手でこいで下るはめになり，みんなで交替で汗だくになった。しかもプトマヨ河に出たときにはすでに午後の4時をまわっていた。

プトマヨ河に出て一服している間に，マネージャーとして，はじめから調査隊に参加してくれていたコロンビア在住の荻野さんが，なんとかエンジンを始動するところまでなおしてくれた。だが日が暮れてしまっては，河幅が1キロ，広いところでは2キロもあり，中州や中島もいくつもあるプトマヨ河を，方向や流れの筋をまったく知らぬわたしたちだけで下ってレギサモまでたどりつくことはとうてい不可能なことだった。

その日は，そこから1時間ほど下ったところの，河の中央にある砂州で泊まることにした。

河の水が減ると，あちこちの浅瀬が水面から出，そのあと1，2日もすると，そこの砂はすっかりかわきあがって，浜べのような感じになる。ひと晩泊まるのに砂州は森林のなかよりずっと快適な場所であった。ただ夜露を避けるために張ったナイロンシーツを通してさし込む満月の月明りは，寝るにはあまりにも明るすぎた。

次の日，今までの調査の間に大部よごれてしまった寝具類の虫干しや，採集した資料の整理をしようということになって，半日，その砂州にいた。朝から雲ひとつない快晴で，太陽は裸で仕事をしているわたしの肌を容赦なく焼いていった。

≪3頭のイルカの舞い≫

8時を少しまわったころ，プトマヨ河左岸のほうのゆるやかな流れのなかから，1回，大きな水しぶきがあがった。続いてもう1回。今度は白灰色に見える背中がのぞいた。アマゾンイルカだった。その動きから3頭いることがわかった。

やつらは20秒から30秒ぐらいの間隔で，かわるがわるなめらかな水面を突き破って，姿を見せてはまた沈んだ。徳田さんはやつらは求愛行動をしているのではないかといった。わたしは，カメラに300ミリの望遠レンズをとりつけて，水面から飛びあがる一瞬のシャッターチャンスをねらったが，次にどこからとびあがるか，なかなか予測できず，なめらかな水の面に距離を合わせるだけでもたいへんだった。

大きな輪を描いてやつらはゆっくりと泳ぎまわっていたが，わたしたちのいる砂州に近づいたときには，水を吹きあげるときの「ブウォーッ」という声がはっきりと聞き取れた。とがった吻を突きだし，からだを弓なりに曲げ，尾をはねあげ，からだを水面にたたきつける。水しぶきが銀色に輝いて宙に舞う。

もう1頭がそれに続く……。さんさんと降りそそぐ灼熱の太陽の下での3頭のイルカの舞いは11時を過ぎてもまだ続いていた。現地人がひとり，小さいひとり乗りのカヌーをあやつって川を下っていったが，3頭のイルカはそれにはまったく無頓着だった。その間，ずうっと，向かいのプトマヨ河左岸の森林から，アカホエザルのうなり声のような重い，長く続く鳴き声がこだましていた。

≪鼻息のあらい動物≫

イルカのことをスペイン語でふつうデルフィンというが，プトマヨ河流域の人たちは，デルフィンということばを使わず，だれもがこのイルカをブフェオと呼んでいた。ブフェオという呼び名はブファール（鼻息があらい）ということばに由来するのかも知れない。そうだとすると，あらい鼻息をする動物，と呼ばれていることになる。

このアマゾンイルカは，プトマヨ河のひとつ北の水系，カケタ河流域には生息していない。カケタ河の下流にかなりの落差のある急流があり，アマゾンイルカが，そこを越えてアマゾン本流からのぼってくることができないからだと，ある現地人は説明してくれた。

プトマヨ河のより下流へいくと，カヌーでぐるりをとり囲み，網をさし込んでイルカをつかまえ食用にしているという話だが，レギサモ周辺ではアマゾンイルカの捕獲は全然行なわれていなかった。

アマゾンイルカは大きいのになると体長3メートル，体重は150キロを越えるやつがいるという。ふつうは1頭か，2，3頭の小さい群れをつくって生活している。アマゾンイルカのほかにマイルカ科ソタリア属（*Sotalia*）の小型のカワイルカもアマゾン上流域に生息しており，しばしばアマゾンイルカといっしょにいることがあるといわれているが，プトマヨ河のわたしの調査して回った地域に果たしていたのかどうか，それを確かめることはできなかった。■



豪快な
アマゾンイルカの舞は
アマゾンの河旅の
ひとつの風物詩である



コンゴウインコ *Ara macao*

すべてのオウム・インコ類のなかで，もっとも色彩豊かなコンゴウインコ類は，アメリカ大陸の熱帯地方の森林で見られる。コンゴウインコ類の鳥は，例外なく，サーベルのような長い尾，鎌のような形の巨大なくちばしをもっていて，それをたいへん巧みに使う。コンゴウインコ類のほとんどが，人里を遠く離れた原始林に生息している。ある種などは，アンデス山脈の標高3500メートルの高地でも見かけられる。

コンゴウインコ類には，スミレコンゴウ属とコンゴウインコ属の２属18種にわたる鳥が含まれているが，そのほか，８種が西インド諸島で絶滅し，現在は見ることができない。

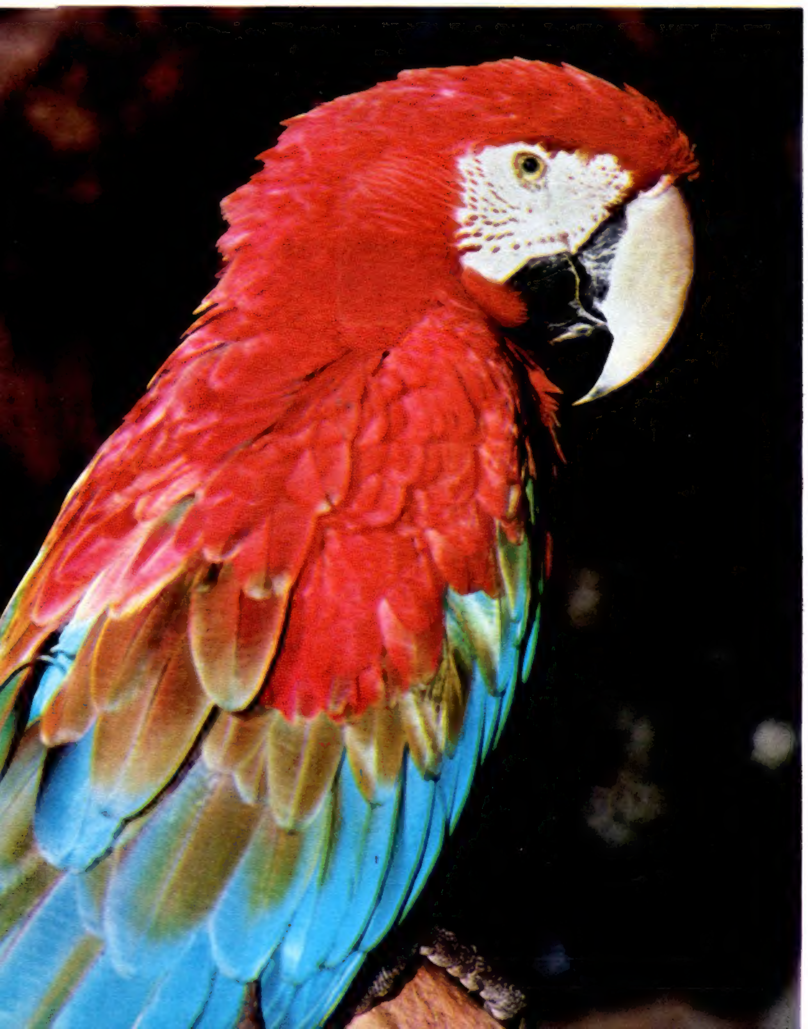
コンゴウインコは，コンゴウインコ類のなかでもっとも大きく，もっともよく知られている鳥のひとつである。全長は90センチほどあるが，そのうちの３分の２近くは尾である。黄，青，オレンジ色，緑，黒などの混ざった深紅色の羽毛（うもう）は，１枚１枚の羽がぴんとしていて，あまり柔らかそうな感じはしない。目のまわりとほおの部分には羽毛がなく，細かくしわの寄った皮膚が裸出している。くちばしはきわめて特異で，鉛直方向にひしげ，鋭く鉤形に曲がっている。巨大な上くちばしが白いのに対し，下くちばしは，はるかに短く，黒い。

コンゴウインコはメキシコからボリビアに

コンゴウインコ。オウム科コンゴウインコ属。
オウム目の鳥のなかでも
もっとも色彩豊かな鳥といわれる。
アメリカ大陸の熱帯地方の森林にすんでいる。
名は金剛インコの意。

PH. J. SIX





かけて分布している。大きな川の流れている平地の，じめじめした森林に好んですんでいる。かつては，人里近くでも見かけられたが，いまでは，ひっそりした場所にひっこんでいる。しかし，山林が伐採され，広大な森林地帯が徐々に耕地に変えられるにつれて，しだいにその生息地はせばめられてきている。

1日のうちのもっとも暑い時間には，くびを肩に沈め，長い尾をたれて，低い枝にとまって休む。そして，数時間も休んだのちに再び活動しはじめる。繁殖期は別として，コンゴウインコは，かなりの数で群れるが，この群れのなかでも，つねにつがいがいっしょに行動している。ヤシや，この地方でサプカヤと呼んでいる木の果実などを捜すときは，つがい単位で捜す。

コンゴウインコは，本来，非常に騒々しい鳴き声を出す鳥だが，葉の茂った，好物の実のなる木を見つけると，すっかりおとなしくなり，仁の抜きとられた種子の殻が，木の下に山と積まれていることさえなければ，この鳥が，そこにいることさえわからないほどである。

コンゴウインコが数百羽という群れをなして飛びたつさまはみごとである。コンゴウインコは，その大きさ，その羽色(うしょく)の燃えるような赤い色，つばさに見られる赤，黒，黄，青の目をみはらせるばかりの配色からして，コンゴウ（金剛）インコの名に恥じない，オウム・インコ類の王様といえる。長い尾を夕日や日の出の太陽に輝かせて飛ぶ姿も，なかなか美しいものである。

コンゴウインコは，オウム・インコ類の一部の鳥ほどには，人間のことばをまねることができない。ふつう，コンゴウインコは，とぎれとぎれのいくつかのことばを習い覚えるくらいである。声は，オウム類にくらべて耳ざわりで，鳥らしいメロディーなどはない。鋭く，やかましいさえずりを耳にしていると，鼓膜がどうにかなりそうなくらいである。

ベニコンゴウ。オウム科コンゴウインコ属。
大きなくちばしは，きわめてがんじょうで
石のようにかたい殻の南アメリカ産のクルミをも
砕く強さをもっている。（左）

PH. W. LUMMER

ルリコンゴウ（オウム科コンゴウインコ属
左から2羽め）とコンゴウインコ。
コンゴウインコはメキシコからボリビアにかけて
ルリコンゴウはパナマからアルゼンチンにかけて
分布する。（上）

PH. P. A. MILWAUKEE-JACANA



他のコンゴウインコ類

他のコンゴウインコ類の鳥も，美しいのでいくつかをとりあげて記しておこう。これらの鳥は，いずれも，動物園で見る機会が多いと思う。

ルリコンゴウ *Ara ararauna* は，コンゴウインコ属の鳥で，パナマからアルゼンチンにかけての南アメリカに分布している。この鳥は，全長77センチほど，からだの背面は青で，腹面は鮮黄色をしている。

ミドリコンゴウ *Ara militaris* は，ほぼ全身が緑色で，上くちばしの基部にはあざやかな赤い羽毛がある。中央アメリカの標高2500メートル以上の高地に生息していて，全長は約75センチほどである。コンゴウインコ属に分類される。

ベニコンゴウ *Ara chloroptera* は，全長95センチもあり，パナマからボリビアにかけて見られる。コンゴウインコ属。雌はより小型



コンゴウインコの雌雄は
羽色がほとんど同じで
つがいは仲よく，ほとんど一生を連れ添う。
全長は90センチくらいである。（右）

PH. J. SOLARO-JACANA



ルリコンゴウ。
しわの多い顔，大きくひしげたくちばし
何やら年寄りじみた印象を与えるが
一般にいわれているほど，オウム・インコ類は
長生きするわけではない。（上）

PH. Z. F. A

ミドリコンゴウ。オウム科コンゴウインコ属。
中央アメリカに生息し，全長75センチほどある。
野生では2，3つがいで群れをなしている。
飛ぶのは速く，高く
樹上で果実などを食べる。（右上）

PH. MULLER

スミレコンゴウ。オウム科スミレコンゴウ属。
他のコンゴウインコにくらべると
目の周囲の皮膚の裸出部はずっと小さい。
全身コバルトブルーの美しい鳥である。（右下）

PH. W. LUMMER



てくちばしが短い。

以上は、コンゴウインコ属の鳥だが、この属にかなり近いスミレコンゴウ属には3種があって、そのうち、よく知られているのが**スミレコンゴウ** *Anodorhynchus hyacinthinus* 別名ヒヤシンスコンゴウである。からだじゅうの羽色がコバルトブルーで、全長90センチ前後である。アマゾン川より南のブラジルの広大な森林にすんでいる。

以上にあげたコンゴウインコ類の鳥たちは、いずれもつがいか、いくつかのつがいが集まって暮らし、毎日、遠くまで採餌のため飛んでいく。巣は樹洞につくり、テリトリー（なわ張り）のまん中にあって、毎年、同じ巣を使う。巣をつくる木の種類は別に選ばない。春、2、3個の卵を産み、雌のみが抱卵（ほうらん）する。育雛（いくすう）は雌雄が協力して行なう。





ズグロシロハラインコ *Pionites melanocephala*。
オウム科シロハラインコ属。シロハラインコ類はアメリカ大陸産のインコで，コンゴウインコ類にくらべてはるかに小さい。
この種は，ギアナやブラジルの森林にいる。
PH. DES BARTLETT



スミレコンゴウ。
オウム科スミレコンゴウ属。
南アメリカのアマゾン川より南のブラジルの広大な森林にすんでいる。（上）
PH. P. A. MILWAUKEE FIGINI

ミドリコンゴウ。
オウム科コンゴウインコ属。
標高2500メートル以上の高地に生息している。額の赤い羽毛が特徴である。（右上）
PH. Z. E. A







ルリコンゴウ。オウム科コンゴウインコ属。
地上では無器用で，軽くびっこをひいて歩くが
木をよじ登るときは，くちばしとあしを使って
じょうずに登る。（右）

PH HOFOTO



オキナインコ

Myiopsitta monachus

オキナインコ属のオキナインコは，全長約30センチ，背はあざやかな緑色で，額から腹にかけては明るい灰色，つばさと尾は緑と青である。ブラジル西部の広大な平野，パラグアイ，ウルグアイ，アルゼンチンおよびボリビアに分布している。

オキナインコは，1年じゅう，群れていっしょにすんでいる。50〜200羽の群れをなし，穀類，それもとくにトウモロコシを好んで食べてしまうため，農夫たちに追いたてられる。

オキナインコはオウム目の鳥のなかでは，おそらく唯一と思われる独特の巣をつくる。高い木に小枝を集め，積みかさねて集団の大きな巣をつくり，それぞれのつがいがそのなかに個々に巣を構える。この集団用の巣の直径は，1メートル以上になることもあり，1本の木にいくつもの巣がつくられることが多い。このアパートのような巣は，1年じゅう，繁殖期以外にも，ねぐらとしても使われる。また，何年も続けて使い，年を追って拡張されていく巣は，かさばって重くなりすぎて，結局，巣をささえている枝を折ってしまうこともある。

他の鳥たちがやってきて，あいている巣にすみつくことがよくあるが，ときにはオポッサムがやってくることさえある。オキナインコは，オポッサムとも仲よく暮らすようだ。

ミラノ動物園の例

オキナインコは動物園に連れてこられても，よく新しい風土に慣れる。ヨーロッパの動物園では，オキナインコを放し飼いにするところがあるが，イタリアのミラノ動物園の例をみてみよう。この動物園には，1934年に南アメリカから移されてきた12羽のオキナインコがいた。3組のつがいが巣をつくり，ひなは，近くの木々を自由に飛びまわっていた。

鳥類学者のモルトニ（Moltoni）は，これらのオキナインコを観察していたが，それによると，放し飼いにされたオキナインコは，動物園のなかを自由に飛びまわり，樹上や花壇の草の上にもとまって，他の鳥といっしょにえさをあさった。大きな鳥かごのなかにつくられていた巣は，しだいに捨て去られ，他の新しい巣が別の木の上につくられたが，その木はたちまちのうちに何羽ものオキナインコのコロニー（集団営巣地）となってしまっていた。

巣づくりには雄も雌も同じように励み，ほとんど1日じゅう働いていた。くちばしに小枝をくわえて運び，これをからみ合わせて，巣をつくっているのがよく見かけられた。この巣には，直径12センチほどの管のような形の入り口があり，その奥は休み場になっていて，抱卵するための部屋がこれに続いている。1腹の卵数は3〜6個とさまざまで，ごくまれには7個の場合もある。卵は白く，楕円形をしている。抱卵期間は約1か月である。

このオキナインコのコロニーは，1940年まではにぎわっていたが，この年のある夜，ネズミが巣に侵入して，卵をみな割ってしまい，ひなも食べてしまったという。

オキナインコ。オウム科オキナインコ属。
木の頂に大きな巣をつくり，つがいごとに
室をつくってすみつく。
翁インコの意。

PH. H. RIVAROLA

セキセイインコ。オウム科セキセイインコ属。
19世紀に捕えられてイギリスに連れてこられ
飼い鳥として人間の手で改良され，このような
多様な羽色の品種がつくりだされた。（**98**―10,11）

PH. B. LOSTER



コンゴウインコは姿や色彩がはでで美しく，オウム・インコ類の王様といわれる。しかし，人のことばをまねる才能は，とくにすぐれているとはいえない。一般に，とぎれとぎれの単語を習い覚えるくらいだ。ふだんは，かんばしった鳴き声をたてるが，よい声とはいえない。生息地がしだいにせばめられている種だ。 *PH. G. HOLTON*







セキセイインコは，オーストラリア原産の鳥である。野生のセキセイインコは，腹が緑，背が黄色で背から頭，つばさにかけて黒い横縞がはしっている。オウム・インコ類のなかでは，からだの小さな鳥のひとつで，グラジオラスの花にとまっているようすをみても，わかるだろう。個体によっては，単語をしゃべるようになる。 *PH. J. MARKHAM*



ヨウム *Psittacus erithacus*

ヨウム属のヨウムは全長約32センチ、羽色（うしょく）は灰色がおもで、尾は深紅色である。シエラレオネからケニア、タンザニア、アンゴラにかけてのアフリカ西部および中部に生息していて、ギニア湾のフェルナンド・ポー島やプリンシペ島でも見かけられる。これらの分布域のなかでは、一様に密林にすむ。

ヨウムの繁殖期は雨期にあたる。この時期には、それぞれのつがいが別々に暮らすが、繁殖期が過ぎると集まり、数家族が一団となり、いっしょにえさを求めて木々を移動する。夜は高い木の上の同じねぐらでいっしょに寝るという習慣がある。

繁殖期には、多くが沿岸地域のマングローブの林の、地上から離れたところに巣をつくる。それは木の幹の空洞（くうどう）にあったり、枝にあったほらをくちばしでひろげたものであったりする。1腹の卵数は2個で、卵は白く、形は少しずつ異なっている。抱卵（ほうらん）は、つがいが交替でする。

ヨウムは飛ぶのは速いが、長い距離を飛ぶことはない。せっかちに、つばさを羽ばたかせて、一直線に全速力で飛ぶ。暗くなったあとでも飛びまわり、夜ふけになってようやく、ねぐらにもどって休む。

とくに西アフリカでは、ヨウムが群れをなしてトウモロコシ畑を荒らすため、被害が絶えない。このようなとき、ヨウムは信じられないほど大胆になり、農夫たちはヨウムを撃退するのに、ほとほと手をやくのである。ヨウムの分布する地域の住民はヨウムを狩るが、それは、ヨウムが耕地を荒らしまわるからというばかりでなく、ヨウムの肉を食べるためでもある。さらにまた、ヨウムの深紅色の尾羽（おばね）を戦士の頭飾りやお守りにするためでもある。

ヨウムは、すべてのオウム目の鳥のなかで、もっとも人間のことばをまねる才能に恵まれている。穏やかで情愛のこまやかなヨウムは、人間のことばに適切な反応を示すため、人間にたいへんいつくしまれている。習い覚えた語句を機会をとらえて使うようになり、まるで人間に尋ねられた質問に利口そうに答えてでもいるかのような印象を与える。

時刻によって、《おはよう》とか《こんばんは》とかいったり、空腹になるといつも食べている食物の名をいったり、家族をめいめいの名で呼んであいさつしたりするのである。また、人の声をまねるだけでなく、口笛やネコの声やイヌの声をまねたりもする。これら記憶力の点では、雄のほうが一般に雌よりもすぐれているようだ。

ヨウム。オウム科ヨウム属。全長32センチほど。
アフリカ西部から中部の密林にすみ
マングローブの林に巣をつくる。
ものまねの才能にかけては
オウム目のなかのピカイチであろう。

PH. J. R. BIDSSOM-N. H. P. A





コザクラインコ

Agapornis roseicollis

ラブバード類あるいはボタンインコ属の鳥は，ずんぐりした姿をしていて，特徴のある短くて丸みのある尾をもっている小さなインコで，アフリカ大陸とマダガスカル島にかぎって分布している。

ラブバード類と総称されるボタンインコ属のインコには6種が数えられるが，そのうち，いちばん美しい種は南西アフリカに分布するコザクラインコである。全長約16センチ，羽色は緑色がおもだが，額は赤，ほおはバラ色，腰はあざやかな青で，くちばしは灰色である。コザクラインコの分布域の南端は，南アフリカ共和国のオレンジ川下流で，北は，アンゴラのベンゲラ地方にまで及んでいる。

コザクラインコは小さな群れをつくって暮らしていて，コムギ畑を襲っては被害を及ぼしている。コザクラインコは岩壁の空洞に巣を構えるが，オウム・インコ類としては例外的に，他の鳥が放棄した巣，それもとりわけ，ハタオリドリ類の廃墟にすまいを定めることがある。ときには巣のあるじを追いだすことさえあり，シャカイハタオリドリの集団用の巣に，多数のコザクラインコが身を寄せるこ

ネズミガシラ *Poicephalus senegalus*。
オウム科ハネナガインコ属。全長22～26センチ。
アフリカ西部から中部にかけて生息し
バナナ，イネ，トウモロコシなどを食べる。
ねずみ色の頭をしたインコ，の意。（上）
PH. A. VISAGE-JACANA

ともある。

造巣（ぞうそう）期になるとコザクラインコは，草や小さな木片を腰の羽毛(うもう)のあいだにはさんで巣まで運ぶという珍しい習性をもっている。コザクラインコの卵はまっ白であって，他の大部分のオウム目の鳥の卵よりは細長い。

しかし，オウム・インコ類としてはきわめて特異なこの造巣方法以上に，コザクラインコに独特なのは，つがいの鳥のあいだの親密さである。他のすべてのオウム目の鳥には見られないほどの強い愛情で結ばれていて，英語でコザクラインコを愛の鳥(Love birds)と呼んでいるのももっともなことである。つがいの鳥はぴったりと寄り添い，頭を相手の肩にのせて何時間も過ごすのである。

コザクラインコは雌雄の羽色が同じである。しかし，ラブバード類ではないが，メラネシアの小スンダ列島，モルッカ諸島，ニューギニア，オーストラリア北部，ソロモン諸島などに生息する**アカムラサキインコ** *Larius roratus* 別名オオハナ（大花）インコは，雄があざやかな緑色なのに対し，雌はほぼ全身が赤で，その外観があまりにも違っているため，一見したところでは，異なったふたつの種ではないかと思えるほどである。

サトウチョウ

Loriculus galugulus

サトウチョウはサトウチョウ属に分類される，尾の短い小さなインコである。そのくちばしは，もろく，高く，下に向かって鋭くひしげている。全長は約13センチ，羽毛のおもな色はあざやかな緑だが，頭部の頂には青い斑があり，のどと下腰が赤くて上腰は黄色，雌ののどには赤い斑がついていない。

オウム目の鳥のうち，このサトウチョウのグループには８種が含まれるが，分布域がたがいに重なりあうことは，まずない。その系統上の位置は，長く議論の対象とされてきたが，アフリカ産のラブバード類，すなわちボタンインコ属に近いらしい。サトウチョウ属の鳥の地理的分布は，西はインド，セイロンからビルマ，インドシナ半島，マレー半島，スンダ列島をへて，ニューギニア，ビスマルク諸島，フィリピン諸島にいたる。

イギリスの鳥類学者バックリー(G. Buckley)の研究によって，とくにインドネシアのサトウチョウと，インドのアッサム，ヒマラヤ，インドシナからジャワ島にかけての地域にすむ**ミドリサトウチョウ** *Loriculus vernalis* の

サトウチョウの雄。オウム科サトウチョウ属。
眠るときは，コウモリのように枝にぶら下がる
全長13センチほど，巣材の紙や樹皮などを
細く切りとり，羽毛にさしこんで運ぶ（左下）
提供　東京動物園協会



コザクラインコ。オウム科ボタンインコ属
南西アフリカに小さな群れをつくって生息する
この属の鳥は，ラブバードとも総称され
つがいの仲がよいことで有名
PIELLS DUBOIS



2種について，かなり詳細な点がわかった。

ぶら下がって眠る

サトウチョウは，庭園や森林の木の頂にすむ。非常にたくさんで群れをつくって果樹園を荒らすこともある。軽やかに声を立てずに飛ぶ。休むためにとまるときには，すべての鳥と同じ姿勢をとるが，眠るときは，コウモリのような姿勢をとる。つまり，あしでぶら下がり，頭を下に尾を斜めにそらしてバランスをとる。この姿勢のままで，向きを変えたり，鳴いたり，羽毛を整えたりもする。

ラブバード類のうちのいくつかの種も，こうした奇妙な習慣をもっているが，このことは，この2属のインコが共通の先祖を持つのではないかという論議に有利な点である。この姿勢は，木のいちばん末端の細い小枝にとまることができるので，木の葉のなかに身を隠すことになるから，外敵からも見つけられにくくなる。

しかし，非常に若い鳥や病気の鳥は，くちばしと頭を背の羽毛のなか か肩羽（かたばね）のあいだに隠して，他の鳥と同じような姿勢で眠る。なぜこのようにするかについて，考えられることは，第1に，若い鳥は，その大部分の時間を巣のなかで過ごすので，頭を下にしてぶら下がる必要がない。第2に，長い時間ぶら下がっているには，血液の循環がうまくいくこと，また，筋肉についても種々の条件があり，それらがあらかじめ解決ずみであることが前提になるが，若い鳥には，これに必要な構造上の変化がまだじゅうぶんになされていないのかもしれない。また一方，鳥が病気のときには，筋肉の力がじゅうぶんでないのであろう。

長い間さかさまにぶら下がっているということは，ほかにもいろいろの問題を生じてくる。たとえば，排出物を排出するときに，羽毛をよごさないようにするため，サトウチョウはきわめて独特の技術を披露するのである。すなわち，からだをゆすり，ぶら下がっている枝と45度の角度にまで自分のからだをもってくる。ちょうどよい姿勢になったときに，排出腔（はいしゅつこう）にたまった排出物を，すばやく勢いよく排出するのである。

しかし，おもな食糧である果実を食べる際には，サトウチョウも他の鳥のような姿で枝にとまる。上くちばしのなかに果実を押しこ

ゴシキセイガイインコ（顔の青いもののみ）
学名は，*Trichoglossus haematod*。
オウム科セイガイインコ属。
オーストラリアからモルッカ諸島にかけ生息する。
全長27～28センチほど，多くの亜種がある。
PH. G. PIZZEY

み、下くちばしとじょうぶな舌を使って、これを非常にじょうずに裂くというのが、もっとも一般的な食べ方である。とはいえ、人間に飼われている場合は、種によっては、えさとして与えられる砕かれた果実の小片を、ぶら下がりながら食べるという習慣をもつ。

サトウチョウは、大部分のオウム・インコ類とは違って、木のほらなどの内部に巣材を運んで巣を編み、きちんとした巣をつくり、そこに産卵する。オウム目の鳥のなかで、巣をつくるのは、この鳥とそれにきわめて近縁で、空洞の内部に巣をつくるラブバード類、および木の枝に集団用の巣をつくるオキナインコだけである。

サトウチョウもラブバード類も、巣材を運ぶときに独特のやり方をする。巣材は樹皮の薄片や、葉、草の新芽、あるいは木くずなどを処理したもので、これをからだのいろいろなところの羽毛のあいだにさし込んで、巣まで運ぶ。アメリカ人のディルジャー（Dilger）は、ラブバード類やサトウチョウの羽毛には、特殊で微細な鉤がついていて、羽毛がばらばらにならないようになっているので、羽毛のあいだにさし込まれた材料が落ちないですむのだということを発見した。

巣の材料を切ったり運んだりする方法については、飼い鳥で観察されてきたが、この場合は、新聞紙が材料として与えられていた。サトウチョウは、新聞紙をあしで押えてひき裂くことから、紙片にくちばしでいくつか穴をあけ、穴から穴へ切りとるようになり、それをしだいに長く細長い帯状に切りとるまでになる。経験を重ねるにつれて、巣の底の丸みに合わせて紙片を曲線に切りとることすらするようになる。

ラブバード類は腰に、サトウチョウは胸、のど、背の羽毛に巣材をはさむが、経験を積んだ鳥のほうがじょうずである。若い鳥は巣材を落としてしまったり、くちばしで運んだりする。このような運び方は、サトウチョウでは雌雄が行なうが、ラブバード類では雌のみが使う。

セネガルホンセイインコ

Psittacula krameri

セネガルホンセイインコは、ホンセイインコ属の鳥で、全長約40センチ、羽色はかすかに黄色がかった緑だ。うなじは青か紫で、くびの環紋は前方が黒、後方がばら色である。分布域は他のオウム・インコ類にくらべて、はるかに広い。この種は、アジアにもアフリ



セネガルホンセイインコ。
オウム科ホンセイインコ属。
アフリカとアジアに生息する。
インドでは各地の耕作地帯でみられる
美しい鳥だが、田畑を荒らす鳥でもある。
PH. B. FOSTER

カにもすんでいる。セネガルホンセイインコのアジアにおける分布域は中国南部，インド，ビルマおよびセイロン島である。19世紀に人間によってベンガル湾のアンダマン諸島に運ばれた数つがいはそこにすみついたし，ケープタウン周辺には，飼育されていた何羽かが逃げだしてすみついている。

アフリカでは北緯17度から赤道にかけての地域，すなわち西海岸からアビシニア高原の東斜面にかけてひろがっている。これらの地域で，セネガルホンセイインコは，サルが数多くすんでいるところに見かけられる。とげだらけの多数の灌木と少数の木々があるといった灌木地帯である。インドでは，各地の，とりわけ平野部にたくさんいて，耕作地帯に好んですんでいる。

人家の近くにすんでいるセネガルホンセイインコは，庭園や田畑を荒らす，人間にとってあまりありがたくない鳥である。畑では未熟なコムギの穂からその穀粒を抜きだしてしまう。また，果実を食べるが，やはり未熟な青い果実をも食べる。また，セネガルホンセイインコがアリやシロアリの塚のまわりにいるのをよく見かけるが，アリの類も食べるのかもしれない。人間に飼われているインコは好んで肉食もする。

セネガルホンセイインコは，夕方，木の上に集まってくる。夜をそこで過ごすのだが，夜ふけまで叫び声をあげては大騒ぎをする。朝になると，すぐに食糧を求めて出かけてい



くが、飛びたつときのセネガルホンセイインコのかんばしった鳴き声は、他のあらゆる物音を圧倒してしまうほどである。

セネガルホンセイインコは飛ぶのはうまいが、地上ではあまりすばやくは動けない。アジアでは、木ばかりでなく、岩壁や建物にできている自然のほらに、また場合によっては、やかましい都市のまっただ中にさえ巣を構える。しかし、アフリカでは、高い木の穴のなかに巣を置くことが多い。既存の空洞を使うこともあれば、自分で穴をあけることもあるが、この場合には、つがいの鳥がいっしょに働く。抱卵し、ひなを育てるのも雌雄が協力して行なう。

セネガルホンセイインコの繁殖期は、アフリカでは8～11月までだが、アジアでは、2～4月の期間である。

セネガルホンセイインコは、ほとんど聞きとれないくらいの声でではあるが、いくつかの語句を完全に発音できるようになる。しかし、こうなるまでには長い時間と根気が必要とされる。ともあれ、発音できるのは雄だけである。雌のほうは、いくら教えこんでも、ことばを覚えることは決してなく、耳ざわりな叫び声を1日じゅう発しているにすぎない。興奮すると、この叫び声はまったく聞くにたえないほどにさえなる。

セキセイインコ

Melopsittacus undulatus

セキセイインコはオウム目の鳥のなかでは、飼い鳥として、もっともよく知られている。セキセイインコ属に分類され、全長は約22センチ、その半分ほどが尾の長さである。外観は優美で、その長い尾のためにすらりとしたからだつきに見える。

長さよりも高さのあるセキセイインコのくちばしのつけ根には、蠟膜（ろうまく）と呼ばれる膜があって、これは、いくつかのグループの鳥に見られるものである。この蠟膜は、雄の場合は青く、雌の場合はふつう褐色である。あしは細く、繊細で、ゆびには長いつめがある。

野生のセキセイインコは、からだの下半分があざやかな緑色で、上半分は黄色、黒い波状の縞がつばさにある。野生の黄と緑の羽色のほかに、人間の手により淘汰され、いくつかの羽色ができていて、空色や白の羽色の個体もある。

セキセイインコは、オーストラリア大陸のほぼ全域に分布しているが、草の種子を食べ

セキセイインコ。
野生状態では数多くの群れをなしている。
草の種子を食べるため
広い草原によく見られる。（左）
PH. G. PIZZEY-BRUCE COLEMAN LTD



キンショウジョウインコ *Alisterus scapularis*。
オウム科キンショウジョウインコ属。
全長40センチ前後，オーストラリア東部の密林にふつう，つがいごとにすんでいる。
写真は雄で，雌は頭部が緑色である。
PH. F. FRIZE





るので，広大な草原にすむ。鋭い叫び声を発しながら，一直線に速く飛ぶが，休んでいるときには，子どもがひとりごとをしゃべっているように，「グチュグチュ」といっている。地上を歩くことはかなり達者で，木によじ登るのも速い。

セキセイインコは9～12月が繁殖期にあたる。樹のほらのなかに営巣（えいそう）し，雌は4～6個の卵を一度に産み，例外的には9個のこともある。卵は白く，丸い。セキセイインコは，1年じゅう，群れをつくっているが，繁殖期も例外ではない。群れのなかでも，つがいの鳥はすぐにわかる。つがいの雌雄は，非常に仲むつまじいからである。

抱卵は雌のみが行なう。最初のひなたちが育つと，雌はすぐに2番めの産卵にとりかかることになる。繁殖期が過ぎると，群れの鳥たちは規則正しく北方に移動し，草の種子が熟す時期まで，営巣場所にもどることはない。

セキセイインコは水を最少限度とるだけで生きていける。そのため，オーストラリアの乾燥した地方でも，大群をなしてすんでいられるのである。しかし，旱魃のときには，野生では繁殖しなかったという観察記録もある。

飼い鳥としてのセキセイインコ

セキセイインコは，1840年にイギリスの画家ジョン・グールドによって，オーストラリアからヨーロッパに運ばれた。それ以来，セキセイインコは飼い鳥として改良が加えられ，今では，ごくふつうに見られる飼い鳥となっている。日本にはいったのは，20世紀になってからである。

セキセイインコは，ラブバード類ではないが，群れの仲間とはよくいっしょにいるし，つがいは非常に仲がよい。飼い鳥としては，寒さにも強く，比較的簡単に飼える。非常な好奇心の持主で，動作も活発である。人なつこくて，ヨウムほどにはロまねの才能があるとはいえないが，個体によっては，繰り返し教えれば，いくつかの単語を繰り返していうようになる。また，ある種の物音をまねたりするようになる。

セキセイインコは，飼育下でも繁殖しやすく，およそ10年くらいは生きている。ちなみに，セキセイインコとは，背黄青インコの意味で，野生のセキセイインコの背が黄と緑の縞になっていることからこの名がつけられた。

アカクサインコ *Platycercus elegans*。
オウム科ヒラオインコ属。全長34～38センチほど。
オーストラリア南部の密林に好んですむが
村落や市街の近くでも繁殖する。（左）
PH. H. BECHTEL-Z. F. A.

クロカミインコ *Aratinga nenday*。
オウム科クサビオインコ属。
小さいが，コンゴウインコ類に似たグループで
ブラジルの森林に生息している。
黒髪インコの意味である。（上）
PH. H. SCHULTZ-BRUCE COLEMAN LTD

セキセイインコの羽色

宇田川竜男

セキセイインコは、羽色（うしょく）の多様さと美しさを楽しむ飼い鳥である。1800年に、ヨーロッパ人によってオーストラリアで発見され、1840年にはじめてイギリスに輸入されてヨーロッパに登場した。1855年、ドイツで繁殖に成功して以来飼い鳥化され、羽色の改良がイギリスを中心に行なわれた。近年は羽色の変化だけでなく、大型品種も生まれている。

セキセイインコの原種は、その名のとおり、背が黄と青の縞になっている。そして、胸、腹および腰は緑色をしている。これらの色彩、とくに緑色は、色素の混合によって生じるものなので、そのうちのある色素を欠如すると異なった羽色を生じる。たとえば、緑色の色素そのものが少なければ、オリーブ色になるし、まったく欠如すれば、ブルー系の羽色になってしまう。また、青緑系の色素を失えば黄色のものを生じる。

近年のセキセイインコは、変化しやすい羽色のものを他の羽色のものと交配することが多いから、羽色は著しく乱れ、中間色のものを生じている。このため、正統な羽色を保持することが強く叫ばれ、そのための保存会も設けられ、活動している。

セキセイインコは、その羽色から並みセキセイと高級セキセイに分けられる。前者は原種のまま背面に黒色の細かい横紋があり、後者はこれをまったく欠くか一部を欠いているのが特徴である。次にそれぞれの羽色について述べよう。

並みセキセイ

グリーンセキセイ

原種そのままの羽色である。すなわち、主色は緑色で、頭部から背にかけて黄色をおび、黒色がかった細かい横紋が密にある。前頭部は黄白色で羽紋（うもん）はなく、顔の下部には2個の小さい黒斑（こくはん）がある。風切羽（かざきりばね）は鈍い緑色、中央の尾羽（おばね）は長く、青緑色で、尾羽の外側の羽には黄色の部分がある。雄の蠟膜（ろうまく）は青く、雌のは肉色をしている。これは、他の並みセキセイでも同じだから、雌雄鑑別は容易である。しかし、高級セキセイのほうは、蠟膜の色によって雌雄を判別するのがむずかしい。

飼い鳥化されたセキセイインコは、野生の原種と羽色は同じでも、色彩の美しさや体格の点で異なり、日本のものでは全長が19〜20センチに達するのがふつうである。羽色も緑色が深く美しい。

オリーブセキセイ

グリーンセキセイの緑色部がオリーブ色になったもので、他の部分はグリーンセキセイと違わない。オリーブ色は緑色の系統だから、色変りとしては、もっとも生じやすい羽色で、早い時期に固定された。しかし、羽色としては不安定なので、よい羽色の鳥を作出するのはむずかしい。

バイオレットセキセイ

グリーンセキセイの緑色の部分が淡い紫色になった羽色の鳥である。セキセイインコとしては、ややはでな羽色である。このためか、あまり好まれないし、作出もむずかしいので、他の羽色のものにくらべると少ない。そのため近親交配をするのだろう、体型が小さくなっている。また、羽色に濃淡を生じやすい。

ブルーセキセイ

グリーンセキセイの緑色部が青色になったもの。青色は濃淡を生じやすいので、よい羽色のものを作出するのはかなりむずかしい。この羽色の鳥は一般に体型が小さいが、これもやはり、近親繁殖によるものと考えられる。なお、この羽色のものは、日本で作出され、原産地のオーストラリアに逆輸出した記録がある。あまり多くは飼われていない。

コバルトセキセイ

ブルーセキセイの青色部が空色に変化したものである。ブルーセキセイにくらべると明るい色彩なので、人気があり、多く飼われている。ほかの羽色のものより、一般に軽快な動作をする。

イエローセキセイ

グリーンセキセイの青緑色が欠如して全身が黄色になったもの。原産地のオーストラリアでも、野生のものに生ずることがあるというから、青緑色系の色素が突然変異によって欠如して生ずるのであろう。黄色は不安定な色素だから、濃淡を生じやすく、年齢によっても変色する。それで、よい羽色のものは少ない。

その他の羽色

このほかホワイトセキセイ、グレーセキセイと呼ばれる色変りもある。前者は白色、後者は灰色である。どちらも羽色として固定したものではなく、たまたま作出されたものである。なお、セキセイインコの羽色は、現在までに300以上が記録され、その遺伝についても詳しく調べられている。

高級セキセイ

高級セキセイは並みセキセイの背面にある黒色がかった横紋がまったくないか、わずかに残っているのが特徴である。これを大きく、ハルクイン系とオパーリン系とに分ける。

黄色ハルクイン

セキセイインコに特有な緑色を失い、上半身が濃い黄色になり、つばさにわずかに黒い羽紋が点々と残っていて、腰と腹の部分は緑色をしている。この緑色に濃淡があり、それによって、黄色ハルクイン系ライトグリーン、黄色ハルクイン系ダークグリーン、黄色ハルクイン系オリーブと呼びわける。しかし、一般には黄色ハルクイン系グリーン、または黄緑色ハルクインと一括して呼んでいる。

ハルクインとは、英語の harlequin で、雑色とか、色紋という意味である。この系統のよい鳥は、全体が山吹色をしていて、胸腹部は水平に黄色と緑色が4対6に分かれている。なお、高級セキセイはイギリスで作出され、日本には1952年にはじめて輸入された。

白色ハルクイン

主色は乳白色の落ちついた感じでエレガントである。腰と腹の中央部に美しい青色部がある。この青色は濃淡を生じやすく、その変化に伴い、白色ハルクイン系ブルー、同系コバルト、同系ライラック、同系バイオレット、同系グレーと名がある。このうち、多いのはブルー、コバルトで、他のものはごく少ない。いずれもつばさに黒紋が少し残り、これがあざやかなものほどよいとされる。

4色ハルクイン

主色は淡いクリーム色、腰と腹の中央部には青色と緑色の混ざった淡色の羽毛（うもう）があり、つばさには黒い羽紋がある。これらの色から4色ハルクインと呼ばれる。腰と腹の色は、青色と緑色の強弱の度合いによって変化し、コバルト、ライラック、グレー、バイオレットになるので、それぞれに4色ハルクイン系の名を冠して呼んでいる。

この羽色には、主色のクリーム色に黄色の混ざるものや、暗黒色の淡い横紋の出るものもあって、理想的に4色を保っているものは少ない。

クリーム色ハルクイン

全身がクリーム色の柔らかい羽色で、一般にミルクハルクイン、または略してミルクと呼んでいる。腰と腹の中央部に緑青色がわずかに現われるものもある。また、背面に黒い横紋が淡く残っていたり、つばさに淡く暗緑色の出るものもあって、全身がクリーム色という標準羽色のものは少ない。これは、白色ハルクインから作出されたものだから、改良の進んでいないものでは白色ハルクインの羽色が現われやすい。クリーム色は年齢とともに濃くなり、よごれた感じになる。

ノーマルオパーリン系グリーン

頭部は黄色、それ以下は緑色で、背面には細かく黒い横紋があるが、背中の中央部から腰にかけて、V字型の横紋がない。この部分の羽色が胸腹部と同じ濃さの緑色をしているのがよいとされる。主色の緑色は不安定な色素なので、濃淡を生じる。この場合に、淡緑色のものが標準色となる。ついで暗緑色、黄緑色の順に評価される。

このほか、主色にはバイオレット、ライラック、コバルト、ブルー、グレーがある。これらは、それぞれ、ノーマルオパーリン系の名を冠するなどして呼ばれる。たとえば、ノーマルオパーリン系ブルー、または、ブルーノーマルオパーリン、青色ノーマルオパーリンと呼ぶ。ノーマルオパーリン系グリーンはとくに

——— *

セキセイインコの羽色

案・宇田川竜男

セキセイインコ	並みセキセイ	グリーンセキセイ イエローセキセイ ブルーセキセイ バイオレットセキセイ オリーブセキセイ コバルトセキセイ	
	高級セキセイ	ハルクイン系	黄色ハルクイン系 白色ハルクイン系 4色ハルクイン系 クリーム色ハルクイン系
		オパーリン系	ノーマルオパーリン系 パステルカラーオパーリン系 ノーマルレインボー系 パステルカラーレインボー系 ホワイトウイング系 イエローウイング系
		ルチノー アルビノ	
	大型セキセイ	オーストラリアン・パイド バンド	

生きものの世界への疑問 3

変わるものと変わらないもの

日高敏隆

種のプログラムがいかに確固たるものであるかは、実験形態学や実験発生学の研究によって、ますます明らかになってきた。

もともと実験形態学や実験発生学という学問は、動物をただ観察するのでなく、実験的にからだの一部をとり去ったり、あるいは逆にある器官をからだのなかに植えこんだりして、その結果起こる変化を調べ、からだのなかでのホルモンの支配や、からだの形ができあがっていく仕組みを知ることが目的であった。いわばそれは、動物のからだに人の手を加え、変化を起こすことをその本質とする分野である。19世紀の終りごろから、これらの分野の研究は、急速に盛んになった。

手品のような実験

初期の実験形態学の有名な研究として、ニワトリの雄・雌に関するものがある。だれでも知っているとおり、ニワトリの雄にはとさかとけづめがあり、りっぱな尾羽がはえている。一方、雌にはとさかもけづめもなく、尾羽もごく控えめである。こういうことを観察し、雄・雌の形の特徴を詳しく調べていくのは〝形態学〟の研究に属するが、〝実験形態学〟はそれだけでは満足しない。なぜ雄・雌でそういう違いが生ずるかを知ろうとするのである。

雄・雌のからだでいちばん違うところは、生殖腺である。雄から雄の根本的な特徴である精巣をとり去ってしまったらどうなるか？　実験形態学はそういう実験をやってみる。その結果、とさかとけづめが小さくなって雌に似てくることがわかった。尾羽にはこれといった変化は起こらず、相変わらずりっぱなままである。

今度は雌から卵巣をとり去ってみる。こういう実験はもうおとなになってしまったものでやるよりも、まだ若いニワトリでやったほうが、結果がより早く、より明確に現われる。卵巣を除去された雌のニワトリは、やがて尾羽がのびてきて、まるで雄の尾羽のようにりっぱになる。けれど、とさかやけづめはもとのままである。



とにかくこうして、精巣や卵巣が雄・雌の形の違いに関係をもっていることがわかる。どちらをとり去っても、ほんとうの雄・雌の特徴が失われてしまうからである。

では、精巣や卵巣をもう一度植えこんでやったら、失われた特徴がもとにもどるだろうか？　答えはイエスである。精巣をとられた結果、とさかとけづめが小さくなり、尾羽だけがふさふさした、雄とも雌ともつかぬ元雄のニワトリは、もう一度精巣を移植されると、やがてとさかとけづめが発達してきて、もとのおんどりの姿にもどる。一方、卵巣を除去されて尾羽ののびてきた、これまた雄とも雌ともつかぬ元めんどりに卵巣を移植してやると、やがて尾羽がぬけかわったとき、めんどりらしい控えめな新しい尾羽がはえてくる。

雄・雌のからだの性的な特徴が、生殖腺（精巣・卵巣）から分泌される性ホルモンによって決まることは、今ではだれでも知っている。今述べたニワトリでの実験は、そのごく初期の研究であった。

精巣や卵巣を除去したり、移植したりして、雄・雌の特徴をなくしたり、雄でも雌でもない奇妙なニワトリをつくったり、それをまたもとの姿にもどしたりするのはおもしろい。けれど、ここで重要なのは、そういう手品師みたいなことではなく、また動物の形がホルモンによって自由に〝変えられる〟ことではない。たいせつなのは、何も〝変えられない〟ということなのである。それはどういうことか？

ホルモンの魔力の限界

むかし、ホルモンの〝非種特異性〟ということばがあった。さっきのニワトリの例でいえば、精巣か卵巣を移植するとき、なにもにわとりの精巣や卵巣を植えてやる必要はない。アヒルのでも、クジャクのでもよく、さらにブタのでもウシのでも、理論的にはよいのである。実際にこういう臓器を移植する場合には、よく知られているとおり、免疫反応があるので、これはあくまで理論的なことである。しかし、精巣や卵巣そのものが問題なのではなく、実は、それが分泌する男性ホルモンや女性ホルモンが問題なのだから、他の動物の精巣や卵巣からそのホルモンを抽出し、それを注射してやれば、臓器そのものを移植したときと同じ結果が得られる。その場合には免疫反応は起こらず、どの動物の精巣あるいは卵巣から抽出した性ホルモンも、ニワトリ

カラーページ解説

*――――

《青竹》とも呼ばれている。

ノーマルオパーリン系、もしくはオパーリン系のものは、背中のV字型のあざやかなものほど、よい鳥とされている。

パステルカラーオパーリン系

パステルカラーとは、落ちついた淡い色のことで、パステルカラーオパーリン系は、背面にある黒い横紋がわずかにつばさにだけ残るか、淡い茶色をおびた程度になっているものである。主色は、前述のノーマルオパーリン系の場合と同じである。しかし、つばさに残る横紋も、ごく淡く黄色をおびた程度なので、目だたず、柔らかい感じをあたえる。ここにパステルカラーの美しさがある。

この系統でも、主色は濃淡を生じ、それによって、ライトグリーン、ダークグリーン、オリーブグリーンに分かれる。このほか、主色にはバイオレット、ライラック、コバルト、ブルー、グレーがある。これらは、いずれもパステルカラーオパーリン系の名を冠して呼ばれる。なお、この系統はイギリスのケンソン氏（Kenson）によって作出されたので、ケンソン氏（またはケンソン系）グリーンパステルカラーオパーリンともいう。ノーマルオパーリンから改良されたものである。

ノーマルレインボー系

ノーマルオパーリン系のもので、上くちばしの基部に沿って虹形に黄色の帯があるものをいう。ノーマルオパーリン系のどの主色のものにも現われるから、その呼び名も、主色の羽色をとり、ノーマルレインボー系ブルーとか、同系コバルトと呼ぶ。また、ブルーノーマルレインボーなどともいう。

パステルカラーレインボー系

パステルカラー系の羽色のもので、前頭部、くちばしの基部に沿って黄色、あるいは濃黄色をしているものをいう。この場合もパステルカラー系の各羽色に現われるから、パステルカラーレインボー系ブルーとか、同系コバルトなどと、その主色の色名をつけて呼ぶ。この羽色もケンソン氏が作出したので、ケンソン氏ブルーパステルカラーレインボーなどと呼ぶこともあるが、一般にはケンソン氏の名は省略する。

ルチノー

ハルクイン系、オパーリン系のどちらにも属さない羽色で、全身があざやかな黄色、背面の密な黒い横紋もなく、目が赤いのが特徴である。一般には、赤目、もしくは赤目黄と呼んでいる。黄色の羽色は濃淡を生じやすいが、濃いものほどよい鳥とされる。一方、淡いものは淡いほどよく、白色に近いものをミルク、またはクリームと呼んでいる。

アルビノ

全身が白色で、背面の黒い横紋もまったくなく、目が赤い。羽色はクリーム色ハルクインに似るが、目の赤いのが異なる。突然変異によって生じたアルビノ（白子）を固定したものである。

ホワイトウイング系

主色はブルーでもコバルトでもよいが、つばさだけが目だって白く、背面に黒い横紋のないものをいう。オパーリン系に多い。主色によって、ホワイトウイング系ブルーとか、あるいは同系コバルトと呼ぶ。

イエローウイング系

つばさがあざやかな黄色になっているものをいい、主色がオリーブならオリーブイエローウイングという。

シンナモンウイング系

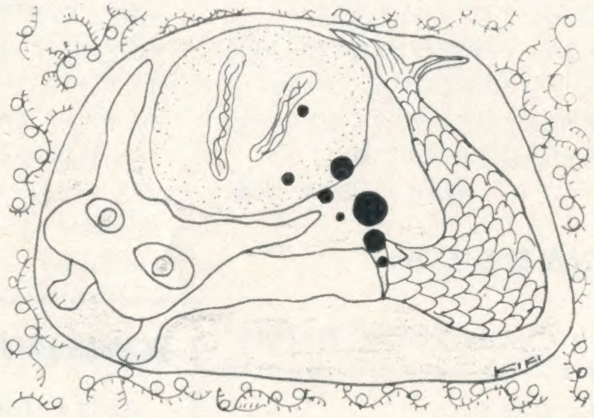
つばさの黒い模様が茶色をおびたもので、ハルクイン系に多い。この場合はシ

のから抽出したものと同じ作用を現わす。つまり、ホルモンは動物の種に特異的なものでなく、種を越えて作用するわけである。これがホルモンの〝非種特異性〟なのだ。

確かにホルモンは非種特異的である。われわれ人間に使われるホルモン剤にしても、むかしはウシやブタの精巣や卵巣から抽出されたものであった。中年になって少し衰えてきたなと感じた上流婦人は、高いホルモン剤を飲んで色香を保とうとした。そのとき彼女はそれがブタとかウシのホルモンであることを、おそらく知らなかったにちがいない。もし知っていたら、きっとためらったことであろう。だが、実はためらう必要はないのである。なぜなら、ホルモンは非種特異的であるからだ。

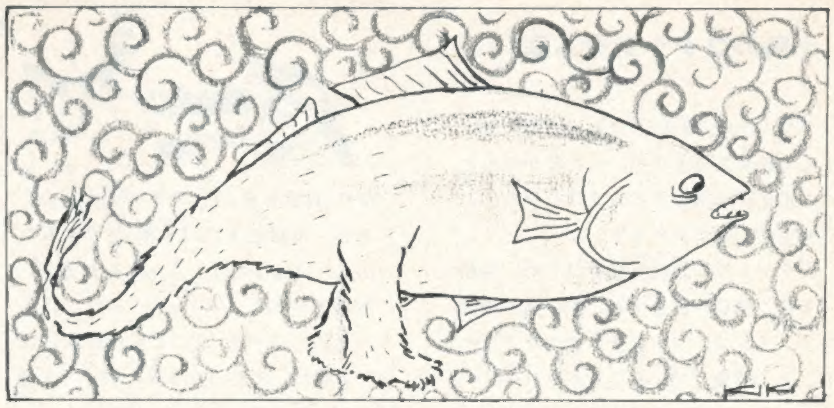
ここまでの話は、ホルモンが雄と雌を〝つくる〟話であり、場合によっては雄を雌に、あるいは雌を雄に〝変える〟話である。20世紀前半のホルモン物語は、このような調子にあふれていた。今でもその感覚はぬけていない。

けれど、繰り返していうが、重要なのはそのことではないのである。卵巣を除去されたニワトリの元雌に、ブタでもウシでもクジラでもなんでもよい、とにかく他の種の動物からとった女性ホルモンを注射すれば、やがてちゃんとした雌の特徴が現われて、卵こそ産めないが形だけは一人まえの雌になる。けれど、それは〝ニワトリの〟雌になるのであって、決してブタやウシやクジラの雌になるのではない。人間の女性がホルモン剤を飲んだときも同じである。ホルモンは非種特異的に作用するが、〝どのように〟作用するかは、まったく種特異的なのであって、そのホルモンを与えられた動物の種ごとにそれぞれきちんと決まっているのである。



ニワトリならニワトリとして、雄ならどのような形になる、雌ならどのような形になるということが、前もって厳密にプログラムされている。ホルモンはこのプログラムの進行にどうしても必要なものであるが、プログラムそのものを変更することは決してできない。雄・雌どうしのホルモンもなくて、どちらのプログラムも進行しないときは、雄とも雌ともつかぬ奇妙なニワトリができてくる。しかし、どう奇妙になるかも、実はちゃんと決まっていて、それ以外にとっぴなものは決して現われない。つまり、ホルモンの欠如も注射も、何ひとつとして変えることはないのである。

実験形態学の進歩は、このような例をいくつも明らかにした。変えることを目ざした実験形態学は、動物が変わらないことを示す結果になったのである。



ニワトリにアヒルの肢

実験発生学においても、事態は同じように進行した。1900年代のはじめ、有名なシュペーマンの実験によって、誘導という現象が発見された。これはだれでも知っていると思うので、詳しく説明する必要はないであろう。とにかく、動物の卵が発生（発育）を始めると、ある部分がその近くの部分へ働きかけ、そこにひとつの器官を〝誘導〟する。たとえば、できかけの脳から左右へふくれ出した部分（眼胞）は、その外側に目を誘導し、眼胞自体は視神経になる。このとき眼胞は目のオーガナイザー（organizer）であるといわれる。

目がつねに頭の特定の部分に1対だけできるのは、眼胞が脳の特定の部分に位置するからである。けれど、目のオーガナイザーであるこの眼胞を、卵の将来横腹になる部分に移植しておくと、やがて横腹に目が誘導される。眼胞をひとつ植えればひとつ、5つ植えれば5つの目が、横腹にできてギョロギョロにらむことになる。もちろんこの目は脳とつながっていないから、ものを見ることはできない。しかしとにかく形だけはほぼ完全な目を、とんでもないところにつくることができる。オーガナイザーもまた、動物のからだを〝変える〟ものとして、20世紀前半の生物学の中心話題となった。

いろいろと奇抜な実験も行なわれた。たとえばある人は、ニワトリの卵に手術をして、肢のオーガナイザーをとり除いてしまい、かわりにアヒルの肢のオーガナイザーを移植した。みずかきのついたアヒルの肢がニワトリのひよこにはえてくることを期待したのである。

誤解のないようあえて繰り返しておくが、オーガナイザーというものは、その器官を〝つくらせる〟ものであって、それ自身がその器官になるのではない。肢のオーガナイザーも、そのまわりの部分に働きかけて、肢をつくらせるのである。結果はどうであったか？　はえてきたのはいつも正真正銘のニワトリの肢であった。逆の実験を行なったとき、つまりアヒルにニワトリの肢オーガナイザーを植えたときは、ちゃんとアヒルの肢が誘導された。

こうした事例をみてくると、われわれは20世紀前半の、つまりこれまでの生物学がわれわれに与えてきた印象とはまったく反対に、種とは変わらないものだという感じを強く受ける。種は進歩、発展を求めて次々と変化していくものであると、生物学では進化ばかりが強調されがちだが、それはむしろまちがっていたようだ。われわれは種の不変性にこそ注目すべきだったのだ。■

（東京農工大学教授）

イラスト・後藤喜久子

カラーページ解説

ンナモンハルクインと呼び，数が少ないので珍重される。

レース

つばさの部分に網目状の茶色をおびた羽紋のあるものを呼ぶ。この羽紋が淡い茶色ほどよい鳥とされている。

セルフ

つばさに模様がなく，主色の羽色と同じ色彩のものをとくにセルフカラー、略してセルフといい，つばさがわずかに黄色をおびるものを，ケンソンと呼んでいる。

大型セキセイ

高級セキセイの大型のものから作出した品種で，全長23センチ以上のものを基準としている。ふつうの高級セキセイは20～22センチが標準である。羽色は，高級セキセイの各羽色系のもののほかに，つぎの羽色がある。

オーストラリアン・パイド系

パイド（pied）とは，雑色とかまだらの意味で，この羽色のものは，ハルクイン系によく似ているが，つばさが鮮黄色で，後頭部には必ず黄色の部分がある。

バンド系

腹部の中央に，白または黄色の太い横帯がある。主色は白色ハルクイン系に似たものが多い。

芸ものセキセイ

飼い鳥では，ある部分の羽毛がさか立っているのを「芸もの」と呼んでいる。セキセイの場合は，頭頂部や背に生じることがある。前者を〝梵天〟，後者を〝背巻き〟といい，両方を兼ねそなえているものを〝梵天背巻き〟という。これは並みセキセイ，高級セキセイ，大型セキセイのどれにも生ずる。■

（農林省林業試験場鳥獣科長）

漢字のふるさと　69

藤堂明保



鴻（オオガモ）　北京語では野鴨 yeya（かも）というなかに含まれてしまうが，とくに大型のノガモをさす。長江の中流，とくにチウチヤン（九江）からポーヤン（鄱陽）湖にかけての沼沢には，秋になると野鴨が群れをなして集まる。江岸のアシが3,4メートルにものびて枯れた，そのぼうぼうたる湿原に，見え隠れするさまは壮観である。

鴻という字は「鳥＋音符江」からなっている。すなおに考えると，「江岸に群なす鳥」という意味になるが，多分そうではあるまい。「江」とは中国を東西に貫通する長江（揚子江）のことだが，また「大きい」という意味を含んでいる。大水のことを「洪水」といい，大声で笑うのを「哄笑」というが，その洪～哄などと同系のことばなのである。

また「鴻雁」というのも，オオガモのことであった。孟子が梁の恵王を訪れたとき，その御苑に鴻雁や鹿が群れているのを指さして，王が得意満面であった。「人民公園になさるがよい」と，孟子がきつい皮肉を浴びせたそうである。■

小鳥のコクシジウム症

小鳥の下痢の原因のひとつに寄生虫によるものがありますが，そのなかでもとくに消化管に寄生するコクシジウムという原虫の一種があります。

コクシジウムは哺乳類をはじめ，鳥類にも広く発見されますが，飼い鳥の仲間でも，インコ，フィンチ，カナリアなども，よく感染していることがあります。

もちろん人間に感染することはありませんが，同じ仲間どうしには経口感染をします。

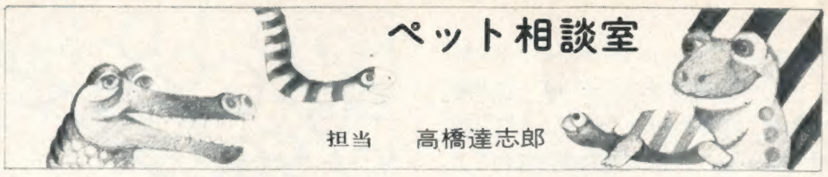
コクシジウムには，いろいろな種類があるのですが，大きく分けて，カナリア，フィンチ類，ウグイス，スズメなどにはイソスポラという種類が寄生し，インコ類やハトなどに寄生するものはアイメリアという種類です。

ひなでも成鳥でも発症しますが，ひなはとくに抵抗力がないので落鳥率が高く，早期に発見して治療をしないかぎり落鳥を免れません。小鳥は急に元気がなくなり，食欲も衰えて，たえず羽毛をふくらませ，黄緑色または黄褐色で水みたいかまたはねばねばしたふんをします。

何羽もいっしょにかごに入れていると，次から次へと同じような症状になり，気がついてから2,3日，長くて1週間くらいで落鳥してしまいます。

治療にはサルファ剤の内服が有効ですが，最近，一般の人には手にはいらなくなりましたので，まず専門家に便を調べてもらい，適切な指示を受けるとよいでしょう。

経口感染をしますので，小鳥の排便に注意し，怪しいと思ったら，ただちにその1羽を隔離し，感染した小鳥のふんがはいったえさや飲み水を，他の鳥がとらないよう注意してください。また発症した小鳥がはいっているかごの底に敷いてある紙は，こまめに取りかえる必要があります。

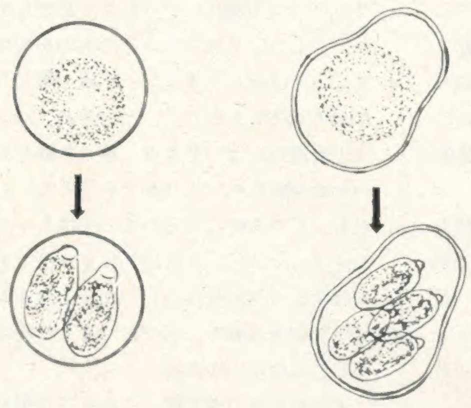


発症した小鳥は，寄生虫のために腸があれて，おなかが痛いためか食欲がなくなり，水ばかり飲むようになります。薬がきいてくるまでにえさを食べなくなって落鳥することが多いので，なんとか薬が効いてくるまで2,3日は，人がえさを食べさせてやる必要があります。

えさを人が与える場合には，ひなのときの差し餌の要領で与えるわけですが，それでも食べないときには，口をあけて，少しずつ粒のまま湯に浸した新しいものを入れてやる必要があります。

すりえさの小鳥の場合，飲み水を与えていないような鳥には，すりえさに直接薬を混ぜて与える場合もあります。■

（小鳥の病院院長）



ふんとともに排出されるコクシジウムの胞子

夏だと2，3日すると上の胞子は下のように分裂して種虫ができる

左　イソスポラ属
はじめ2個に分裂した後
1個に4匹ずつの種虫ができる

右　アイメリア属
はじめ4個に分裂した後
1個に2匹ずつの種虫ができる



城ケ島のウミウ

北原白秋の『城ガ島の雨』で知られる神奈川県三崎の城ケ島には，多数のウミウが生息している＝**写真**。ウミウが生息している断崖は，赤羽根海岸寒鯛の鼻と呼ばれ，高さ約30メートル，長さ約350メートルである。県では，このウミウ生息地を県天然記念物に指定している。

毎年，10月下旬になると北方から大挙して飛来し，最盛期には2000羽にも達し，各個体が思い思いに断崖の割れめや岩棚に陣取る。太平洋の荒波がうち寄せるこの断崖に，黒っぽいウミウ，それに白いウミウのふんが，おもしろいコントラストをなし，なかなか壮観である。



わたしが訪れたのは昨年11月下旬だったが，まだウミウの数は500羽くらいだった。黄褐色の地に，まばらな黒褐色の羽毛がまじる幼鳥もかなりいた。よく見ると成鳥は崖のいい場所に陣取っているが，幼鳥は一般に悪い条件のところにいるみたいだ。それでも自分のなわ張りがあるらしく，他の鳥が近づくと盛んに威嚇して追っぱらう。

当日は西風が強く，崖から吹きあげる風のため着陸も思うようにならない。つばさをひろげたまま，しばらく滞空している。ようやく着陸しても，他の鳥のなわ張りにはいると，その鳥から追いかけられ，ほうほうのていで逃げだす様はおもしろい。

こうして冬が深まるにつれてウミウの数もふえていく。ウミウが北の繁殖地に帰っていくのは5月上旬。それまでの城ケ島は「ウミウの島」である。

また，この断崖の下層部には約200羽のヒメウも生息している。そのほか，岩礁の海岸にはクロサギもいるというが，なかなか巡りあえない。■

（横浜市・坂梨輝男・26歳）

へんなレジャー

わたしたちのなかには，釣や狩猟を，すばらしいレジャーだなどと考えている人がとても多い。

しかし，釣や狩猟で生活をたてている人ならばともかく，レジャーで動物を殺すなんて「下の下」だと思う。やっている人は楽しくてしようがないのかもしれないが，釣や狩猟などというのはいちばんくだらない，いちばん残酷な，レジャーの部類にもはいらないようなものだと思う。

動物はそんな人たちのために生まれてきたのではない。動物たちのことをよく考えてやって，えさをやったり，巣箱をつくってやったりするくらいの気持がないとダメだ。「万物の霊長」といわれる人間としての価値もない。

こういうことをよく考えて，へんなレジャーはなるべくやめてほしい。そして自然を豊かにして，その自然にふれてみれば，動物のかわいさなどがわかってくると思う。釣や狩猟が，動物たちにとってどういうものかも，よくわかると思うのだ。■

（静岡市・繁森　隆・12歳・小学生）

編集部より

88号「仲間のひろば」に掲載された東京都世田谷区・泉茂雄さんの『動物を愛するとは？』について，編集部に多くのかたがたから反響が寄せられました。そこで，代表的なもののいくつかを泉さんに見ていただいております。泉さんの感想を含めて，またこの問題を取りあげたいと思います。

裏表紙説明

ミゾゴイ *Gorsakius goisagi* **幼鳥の擬態**　ミゾゴイは全身がチョコレート色をしたカラスより大きなサギ科の鳥である。日本には夏鳥として渡来し，繁殖する。冬は台湾や中国南部，フィリピンなどに渡る。

渓流のある暗いスギ林などにすみ，サワガニやミミズを食べている。巣は樹上に置かれるので，ヨシなどの水草に似せたせっかくの擬態もあまり有効とはいえない。

同じような擬態をするものにヨシゴイがあるが，こちらは水辺の草のなかに巣をかけるので，外敵から身を守る役にたつのである。

長いくちばしを上に向け，くびを精いっぱいのばして不動の姿勢をとり，腹側をつねに外敵に向ける。くびから胸にかけての羽毛の色合いがヨシなどに似るのだろうか。そのようすは，けなげでいじらしく，撮影もそこそこに退散してきたことだった。　撮影　大田　眞也

次号予告

2月7日発売

世界動物百科
99号　2／18



クジャクバト

カラーページ

ハト目
ハト科
モリバト，カワラバト，ドバト
リョコウバト，コキジバト
キジバト

私たちの仲間

サファリ（中） 人と動物	小原秀雄
悲しき習性　その1 アマゾン動物記 11	伊沢紘生
カラーページ解説 キジバトの生態	野沢進之輔
ドバトの代表的品種	黒田長久
生きものの世界への疑問 5 自然淘汰の役割	日高敏隆
漢字のふるさと 70 鵠（ハクチョウ）	藤堂明保

第65号～第128号（鳥類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100
TEL. 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530
TEL. 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802
TEL. 093－531－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460
TEL. 052－231－8131

世界動物百科　通巻99号　昭和48年2月11日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人 大田信男　発行所 朝日新聞社　東京 大阪 北九州 名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ミゾゴイ幼鳥の擬態　説明30ページ

雑誌0632－2／11